渡辺 悠生（わたなべ ゆい） 第八小 5年生

作品名：命について考える

図　書：犬たちをおくる日

私が、この本の中で一番心に残った場面は動物愛護センターに収容されていた犬達が殺処分されるところです。せっかく生まれてきたのに人間が自分達の手で殺してしまうのがとても悲しく思いました。この本にはえひめ県動物愛護センターで本当に行われている事が書かれています。えひめ県だけで年間に約四千頭の犬達が、このセンターに収容されるそうです。その中の一部は、じょう渡会で新しい家族にもらわれていきますが、ほとんどの犬がここで短い一生を終える事になります。本来ならば、大好きな家族と楽しく幸せな日々をすごして、最後は家族に見守られながら一生を終えるべきなのに、せまい部屋におしこめられて、ボタン一つであっという間に殺されてしまうその犬達はどういう気持ちで死んでいくのでしょうか。その気持ちを考えると、とても悲しくて胸が痛くなりました。

本の中に、実さいにあったエピソードがいくつかありました。その中の一つに、センターに犬を預けた家族が数日後にセンターに来て、引き取りに来たのかと思ったら、「殺される前に記念写真をとりに来ました。写真がとれたのでもういいです。」と写真だけとりに来た家族の話がありました。犬はむかえに来てもらったとちぎれんばかりにしっぽをふり、喜んでいたのに実さいはちがったのです。私は「記念写真をとるほどなら、きちんと最後まで世話をしてあげればいいのに。引き取れないなら写真をとりに来る資格は無い。」と強く思いました。その時の犬の気持ちを考えると、とても悲しかっただろうと思い、怒りがこみ上げてきました。

私の家には犬とねこが一ぴきずついます。犬は六才で、五才の時に前の飼い主さんがアレルギーがひどくて飼えないからもらってくれないかと相談されて私の家で飼う事になりました。ねこは五才で、私の祖父が飼っていたのですが、祖父がけがをして入院してしまい一時的に私の家で預かっていたのですが、急に祖父が亡くなったため、そのまま私の家で飼っています。犬もねこも同じ時期に私の家に来る事になったので家族でもめる事もありましたが、いっしょに暮らすようになっておたがい心が通じ合って、今では二ひきとも大切な家族です。おもちゃで遊んであげたりいっしょにお出かけをしたりしています。毎日のエサやりやトイレの始末は決して楽ではありません。病気になると言葉が話

せない分心配だし、病院に連れて行かなくてはなりません。本の中に「大切なのはペットを『飼う』という行いではなく、ペットを『幸せにしたい』という心だ。」と書いてありました。私もいつもそのように思って二ひきとすごしたいと思います。そのように考える人が一人でも多くなってセンターに収容される犬達が一ぴきでもへって、幸せな一生をすごせる犬達がふえていくといいな、と思います。